心象風景

imaji

加藤鉦次
Shoji Kato

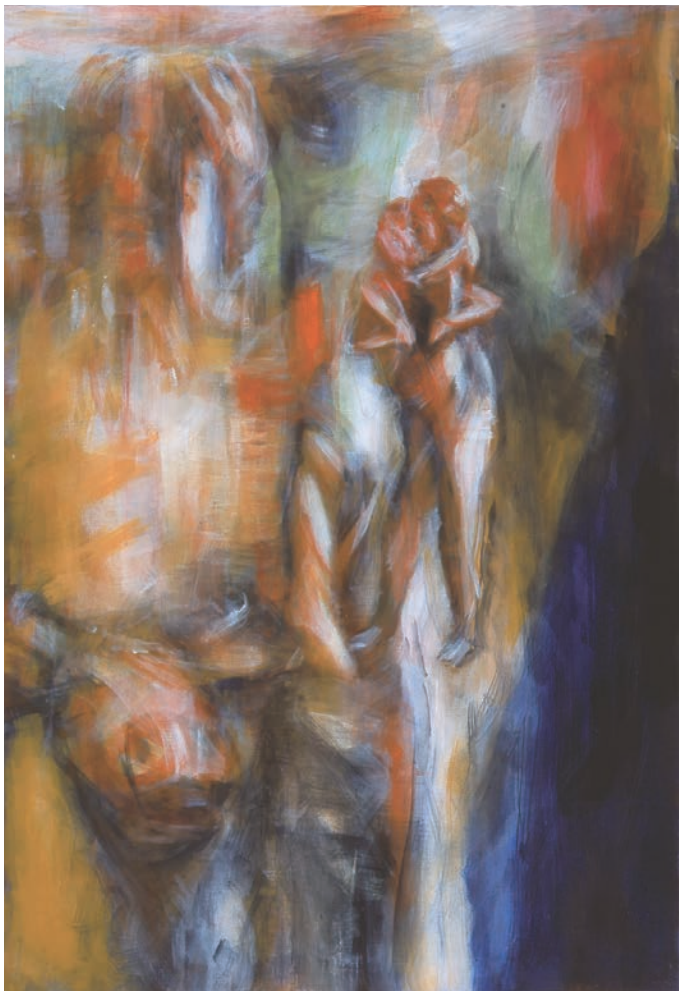
生々流転

幾年、身近に繰り返し起きる四季折々の大地の営み。「農耕」と「祭り」、記憶を重ねて
心象風景を描く。そして2011.3.11、ここから始まる明日へ。

ノアの明日Ⅰ　2910×1970

取材地・宮崎県石巻市門脇町

そこにあったものは地盤沈下と水溜り、何も描くものはない。まさに「失われた風景」。
無から創造することが表現の原点。自らも、襟を正して原点からの
出発となる。夢見るものは、大地の「農」と「愛」



ノアの明日 Ⅱ　1167×803

自像 Ⅰ
333×333

ノアの明日 Ⅲ　1303×803

自像 Ⅱ
333×333

自像 Ⅲ
333×333

心象風景と混合技法

過去の記憶をたどりながら心象風景を表現することを制作の主題としている。

移ろいやすい図像、油彩の求める物質観から遠ざかり、実態のない絵画を作り出す。漂う抽象的画面に事物を配置し、時空を超えた空間を作り出す。

事物の重力を取り除くことで浮遊感を描きだし、画面での展開を自由にする。

日本画の平面的形態と、油彩絵具の透明性を用いた奥行き、相矛盾する成り立ちが同時に必要となる。現実空間と心象空間の狭間で、水性と油性、水と油の問題が、エマルジョンによる融和によって解決する。

水彩画と油彩画との橋渡しをするのがテンペラである。卵の特性により油彩のうえに水彩がのる。油彩・テンペラの混合技法に出会い駆使することにより、日本的空間を追求する。

四季折々の転回を自由にし、心象空間を可能にする。

ヘビに出会った日　1940×1620

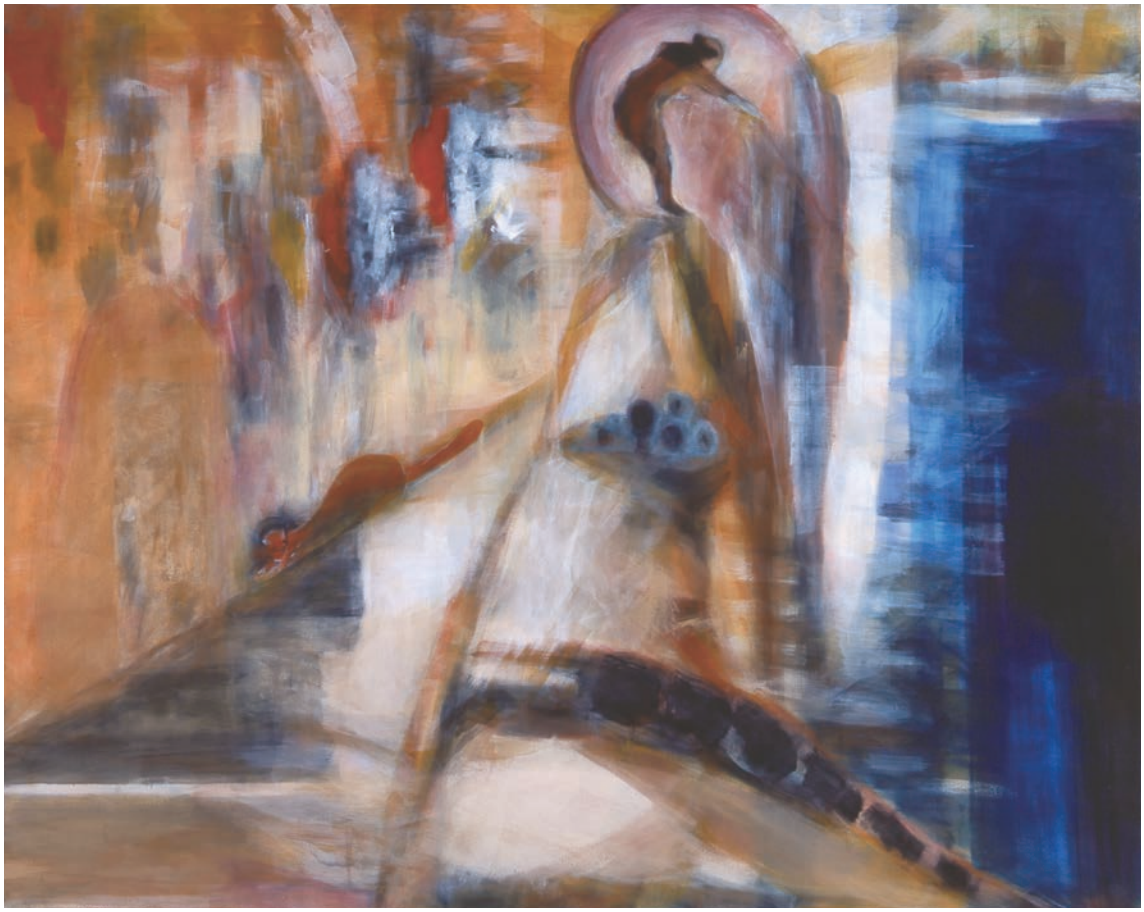
季節の中で Ⅰ
410×410

季節の中で Ⅱ
606×606

テンペラの歴史的変遷

キリスト教文化の初期ビザンチン文化の描き記されるイコン（神の図像）は、おもにテンペラによって描かれている、二次元的空間は天上に居る神の存在と地上とを繋ぎ奇跡を描き表すもっとも都合の良い表現技法である。細密に描くことができ、色鮮やかな平面的画面は絵画的であり装飾的である。

同じキリスト教でもビザンチン文化とイタリアカトリックでは神の存在が異なるものがある。神が自然空間に居るとなれば絵画もそうあらなければならない。画面において空間の追求がおこなわれるようになるのである。



20才の頃　2273×1818

季節の中で Ⅲ
606×606

季節の中で Ⅴ
606×606

混合技法

時代が中世からルネッサンスへと流れていくなかで描画材もテンペラから油彩の確立へと変化していく。徐々に空間での存在の確かさを求めてテンペラ絵具と油彩とのバランス変化していく。そして、北方・イタリアルネッサンスの画家のなかから油彩のメカニズムのためのテンペラ絵具というかたちで確かなものとなった。これが混合技法である。

その特徴をあげるならば、油彩上に水彩で描く視覚的灰色段階による形の浮き出し、色と形の分離、重層的な光の反射などである。

田植え　1303×1940

膠と油のテンペラメヂュウムを使用

テンペラのメヂュウムには数多くの処方がある。今回の制作には主に膠と油によるものを用いている。ゲル化直前までに冷却した膠水に、リンシードオイルを少しずつ滴らしながら加え、ミキサーで攪拌する。オイルを滴らし終えた後、界面活性剤としてのアンモニア水を数滴加え、さらに攪拌すると、乳白色のエマルジョン（乳濁液）となる。膠水とリンシードオイルの比率は、容量比で2:1 ～ 3:1である。メヂュムは密閉式瓶に入れ、冷蔵庫で保管する。

顔料とメヂュムはおよそ1:1の比率混ぜ合わせて描画に使用する。

祭り　2590×1940